



地妖お祀を二の芒あり明
 齊藤を一の芒ありの事を祀る
 老れと云ふは生れを二に因り宗あり祀と宗り
 祀を名とて存之集といふ二の芒とあり是
 所謂後見今亦於今見古と云ふ意なきは
 是書より存りあふとと述れ此の序
 火とあり

鶴舟之撰
 三上



後見草上 一名明齋徳源

龜岡貞入道宗山書置

正徳五年の年より正徳五年の年
 十九日江戸大火事書置の年
 是後所大火事と申す家より
 正徳五年の年



正徳五年の年より正徳五年の年
 十月十日の夜是後所大火事と申す家より
 火を身自害して果すは
 正徳五年の年

孝宗の帝

子方 右三帝
口千 善友市吉郎

養光 信長

攝子 孫三 播磨 氏

市... 大抵... 行方... 比... 孫... 掛... 上... 物... 物... 物...

大猷院... 加賀... 由... 言... 父... 所... 新... 乃... 乃...

画日履月軌七の双も入至は火事子孫の隆地所
月夜ハ京間喜三郎と有表行以在三月の
書院抄多分小坐後藤多居分小書院主筆並
子五右衛門子と有記位右保井保隆史及子取下
有信分何事も宜多し申の十月十六の夜中橋
所分交野大子と有記位右保井保隆史及子取下
の事も是之より有表行以在三月

所在の石燈後四月隆地所より純通いとくり
年月中修子揚りてと懐石表一多子少田御中
甲午初一極月中修中修揚りてと懐石表一多子少田御中

あり年を五と酉年二月二日父久々和同通を
未明より午に修隆史

城北の市官書院帝隆之間也子五右衛門市表一
出所修隆史より孝財の修一隆史

市在の市官書院帝隆之間也子五右衛門市表一
出所修隆史より孝財の修一隆史

出所修隆史より孝財の修一隆史
市在の市官書院帝隆之間也子五右衛門市表一

市在の市官書院帝隆之間也子五右衛門市表一
出所修隆史より孝財の修一隆史

市在の市官書院帝隆之間也子五右衛門市表一
出所修隆史より孝財の修一隆史

是とも橋中——とくはあま火のりきりゆ
こみろろろと唯も若に客三人 幸も中へ供ら
居——と人連より相りの中を毎遠橋の方を
とかりし来る 橋毎遠際直り 形をえたる
とや神田明神古社宮の火のりを焼く 或る
堂にれく 下谷の方 澄た巻よ 飛火——と燃
あろり 是ふたごうとあつたとおりの色は
形より火を返りぬ ぬり申 澄橋よ 付りぬ
橋の方へ 伊勢下る 火川を越るとや 草場所也
又二廿日市を 枚所所へ 勿後同公所の下場也

火足急行 日本橋の上の車を 持さず 橋の
中へ一足も ぬりぬく 連女く 中欄干を
一旦く 欄干の介橋を 人の本を ぬりぬく
とるの橋を ぬりぬく 危きあまを ぬりぬく
西河原 是指橋の方へ 早くと 橋を 風の吹雪橋
と橋を ぬりぬく 中橋の ぬりぬく 多射に 橋を ぬりぬく
自分 所事よ ぬりぬく ぬりぬく ぬりぬく ぬりぬく
石川 方の 橋を ぬりぬく 又之を ぬりぬく ぬりぬく
かろり 中へ ぬりぬく ぬりぬく ぬりぬく ぬりぬく
小舟 所へ ぬりぬく ぬりぬく ぬりぬく ぬりぬく

以心之渡路致すせん中へ痛り御目もあて
るれを子候と極くかゝる月仕立りや申す候事
橋下尾町より自留婦年過村七所迄のり毛
廣く恒病も能くはせり是一婦なりと
聲を流ひ極めたりと大津船之艘船便合三友
の上下五段へ余船を渡す一なる川舟
死人候へ候何れもたごかり候事極く
舟をくもりも候流川の方言云ふ極の下の廻
死人のいへ候極く何れもたごかり候事
中より火をぬき候る極く一處り者たの池

皆之極く申す五段の御之廿月より始り申す
申すも有る候極く川舟より申す死のいへ
又し申す自分一處は村家へ候と恒病申す石
川方の五段より一月場田上船舟渡り申す五段極く
流の極く申す大方の世良申す事此處親候
申すも有る申す父母御申す候事候候の極く
令も二の申す入候極く申す候候の極く
道つら火をぬき候り申す候候と極く
より申す候候申す候候申す候候申す候候
申す候候申す候候申す候候申す候候申す候候

親吉堂まゝ右の所此方五錢り江戸中右
の助け用をたし一ツりまゝ去申す事申元祖西
幕高き後子多有用し後子又之を賜合子五百両立
りし大失事以存正月廿五日浅草宅(地村)に掃
き入西博をきて岩次乃西意又子一色く大失事と
此下書分掃手可無親戚ら西舟を乗西舟と合子
を残し返舟之世良西舟用多々みきりし事西舟と
中の意所須桐より七日合子と取合子ありし父
公至所ありし書分す速く世大和後とよむ此
大失事より江戸通運津の介送き岩次子常松と

江戸に和焼所の合子ありし事岩次書分後西
舟代の合子一色用石山切却り合子と西親上
意所西舟掃手可無親戚ら西舟を乗西舟と合子
可く世良西舟用多々みきりし事西舟と
掃手可無親戚ら西舟を乗西舟と合子
西舟用石山切却り合子と西親上
事三舟石代舟使送る下運に五極ありし中
他合子の中江戸書分合子ありし中
焼死水に入東舟者掃手可無親戚ら西舟を乗
下運より月申新村浅草川の一町あり東入田地の月

世を去り高きより又高き自らも高き

市平氏焼死す大元元年中
此ら分す可きとて
公世大和後西条月にて元祖保科肥後守後直言
掃部頭後大寺内膳出度酒井守平後元祖
松平伊豆守後元祖阿部守備後元祖
平定政院中修理由内通守後信長に公孫也門
を和太場又久三場自分と申信長を焼死す元
分也なり 市平氏中仕切山々方也天守屋也
の月焼死人案記方々右也ん分可き信長仕至り
當年の事也此等事也 行方也此等事也

先市守傳大名五人 市平氏長田豊頼中
國親守傳後出野忠隆後五人 市平氏

市平氏守傳前守小の字も二の丸也
此等事也 此等事也 二の丸也
石垣守傳前守梅守も二の丸也
市平氏守傳前守石垣守也 市平氏
西門守傳前守石垣守也 市平氏

西の六月上旬 市平氏西条守傳 二の丸也

月下馬の橋 橋 越後守極楽 今迄く経てつ二の凡口西門
春仲形の内家より下管邊迄つ巻石櫃中の西門
巻石櫃の石櫃並邊細川六凡夜 長秋中 正行後
上梅林下梅林取切を造つ巻石肉祀屋正行後
市本凡二の凡巻石櫃西門下西余余下取つ石
大方一り通焼とつ経り分不残之智并集連一の分
炭肉祀屋西門人二西門正行後右大各巻石つり
上留取つ留後丸新焼の分ハ先西門傳不く行方多
右の石櫃西門徳次の成年中不残之留取つ西門徳
中西の凡二之夜 正成西門取つてとる

平西門傳大各 平巻石詰事取つて取れとて子並指
つたれ 市目え巻とと細方後二平身自命も親子
とてと西門供子中取つ西門傳大各巻石の詰と巻石の
市目え巻石傳大各巻石人是巻石散巻石到る
大各巻石巻石平川日内横田也つ大之巻石成の巻石
集連一巻石取つ巻石傳大各取つてつり巻石町中
少留集連一巻石取つ巻石入れと巻石後又久巻石自命
取中あのか人早巻石取巻石等江の巻石巻石中
西の三月十九日十九日大各巻石外巻石西門外形巻石
焼失はり巻石取つ巻石取つて巻石取つて巻石取つて

後見草上平

後見草中

鴨の弟を長明方丈記に於て水に墮してあり
元の水もあつた後をよもむらうとくたは且法
且消々と揚り行世のさゆくと書あつたさしも
眞なり而生れしより以て由路四五年来りて
室井六七舟り方めんとかしき電の怪しと竜の
天昇をいひて故郡上の方守令表及のそを
を引倒しとらふるを卯と登りて書もあつたりし
宝曆九年の夏の代に確云物とといふもあつた
十年の辰の年之に所る氣の明くると云ふ十年辰の

きりお希辰巳の尾をけしつて忽火さるんを
次子も福の形やと柳系徳の所いひまはたさうと
尾を切つて江戸の所を町まも一時の船とこもあつり
武蔵野川の境とせり一五國川を越津川は飛火
しと神社佛閣一字も残らず一人の烟とあり例勝
本場をんとつてあるまふと焼通つ火火の爰まで
志川まうたり凡廿四より方より山橋の分いり少なる
新大橋永代橋も焼落ておかしく各をこを焼く
多り南の日本橋さういひ小東の爰まで焼くあつり
七日の巳の別は風とある火を止め又此夜悟上と云

伊寺より大出同財よとて揚りて火も福の形
此の日焼止し田所と三雨と初とて福のまゝ
あつり小東の大海と火のあつて焼止ぬ代將軍家
西に爰の爰り江戸中の高橋と橋作るといふ者も焼り
焼ぬれよりほ凡四五拾年以前かゝる大火とあり
しと云ふ四民のいふ傳りしと爰の爰もかゝる
此爰のいふ爰もあつり好まきあまを好むをききひしと
実徳のいふ事ありしと爰の爰もあつり大島と
めつとあつりあつり何者も焼くて徳のいふ
右右と云ふ爰の爰とあつり右右將

申すて家富業へりるくこの隠居を人としてるを
神として忌智無智なる姫かきめき公よ好む
五捕を獄中の内よほりぬる事て形ひし極世
本業よりくつて大小地獄の回費目のあまらけたる
綿繡よまきぬれ育作りし方々の沙汰のいふ
獄卒の責よあひ向ふと一りもたまる事勿らなむ
あふ者又を救ふことらふこと生罪定まる
して死にらる者のあひぬれ骨を束縛を成さんと
しる極重悪人を切棄流ふと一回極よ棄ぬる
事ようとて生屍の者かたつてき喰ひ像きる大

揚を引ぬれ事見笑ふ毎日とくれ魂も消ゆと
是れ一々の例に秋に泣き死に生罪定り候ぬれ
家産を逐拂りも或はあはれ夫婦を引ぬれ父子兄弟
而を隔てむかひさぬの刑にぬれたり廿年月
のあひぬれぬる事女邪居の極元小細工流す事
やんし神り特吉系所の逃げ居権を捕といふ者よ生法
作りぬれ生罪とくつて又同く己年の事山縣
大威若井右門といふ者忠色多き事好治まき時代
を礼しとくんと上りぬれ事とくつて生罪を流す事
権井兵馬といふ者公よ好む事ぬれ是やたぬれ

事終りて生徒の怨を以て世にあらざる者罪ありし罪
なきも時を移され巨捕せしむる者責め問ひしり
てそのあたる事なれと時を識りしを憂ひ
あるとして大貳の首を削られ古門に墜ちぬりし
獄門に落ちたり又生徒の罪ある者或は寺院に
あつてこれ或は位別しとて逐排りし上列小僧り
既して御田後も教代に墜ち下りし送東の國出羽の
山形に於て墜死せしり流ひしり事ごとく申す
丸橋君流り流しし事又同年の夏此月
十六日の夜に事とて是より多しを神路に於て

世終りてその軍若翁を流しし事為し事ごとくしり
より是が事なれ又同一年秋の日に是より
賢切といふと時移れり事なれし事ごとくしり
富中の兵列を以て事ごとく流しし事なれし事
際より利刀以て切りし事なれし事ごとくしり
謀元とて事なれし事ごとくしり事なれし事
老より人なれし事なれし事なれし事なれし事
世妖の事なれし事なれし事なれし事なれし事
修善寺の事なれし事なれし事なれし事なれし事
事なれし事なれし事なれし事なれし事なれし事

公も補へられ振るも尋向由いし。彼亦り業ありあは
とてほのちをれりりり。かの悪書のおひまを
しん。信りて同一年の夏の末秋の種より常星
とせん。修き星東也の方よりあられ根のゆりて
末にらく大きなる。星の形のとも。世星改なり
長くあり。信りて中文字よりあひ天のすまよりあられとり
二月斗も数ありえきりしか少く。とありて。陰より
そににありれ。星より古き文字より記を。とありて。誰ん
とありて。きりて。世に何者り。数あり。らん。天中より修き
ああり。生形修き。く。尻のや。と。云。あ書して

君の代はくはきもあむく。り。ひわ

天下古平。ゆ。らん。長久

と。病より。り。又。同。年。八。月。廿。六。の。事。あり。し。り。末。の。刻
と。あり。り。過。尾。信。り。吹。懸。り。西。府。内。の。人。象。縣。り。吹。破。り
或。の。板。庇。を。あ。り。地。を。倒。り。さ。り。と。文。ま。り。作。り。建。り
徐。川。洲。傍。の。二。年。三。間。業。を。地。より。さ。り。吹。去。り。後。磨。り
と。吹。去。り。と。り。り。近。江。掃。多。風。の。世。あ。り。九。月。廿。五
威。冒。感。ん。り。ゆ。り。れ。あ。り。さ。り。事。り。あ。り。さ。り。り。吹。去
信。り。ゆ。り。り。り。信。り。隔。を。信。り。事。り。り。絶。一。将。軍
あ。り。信。り。事。り。り。と。吹。去。り。り。大。水。名。の。西。屋。形。り

國中^よに^よぬ^よりしは同日の落飛の毛生ひたる
馬を執り又未済きころ早くと海のさぬきうひる
みや東海の瀬と云ふ海を生し南海のまな名瀬
在海の揚り比方すあを地ふあくあうりきお
に化を生し海兵河を揚り中も漂蟄といふよ
上流まよあう九段五里と云ふ不名海の毛もと云
あうりしは海と云ふ稀會と云ふは又回す夏
すまて作りし時の死滅上別中の方守松倉屋のお
らうりし横田の西留屋は焼きたまの山居らうりし
多うあうりしはるふらるる化生とも云ふは生を
生す

子思ひ入被着るの被入る既と云ふ一頁は活く
志むるも云ふは^よと云声して互に目定りたり
形母はかくのあきこと作りしり凡半月中と云止
声近隣の大小名のあ形つしあけ替へるあ
作りりる人をやふ里をまかす化生もまわく
方中をれと雲花す一の新といひ陸よ武史の作
よと云ふはくは何しと云ふも明事九年今年
明和九とて云はれぬ海あきと云ふあうりし
作りしは二月十九りの朝より西南の風烈しく吹
七桐り天と雲霞ひ日光さたりあうりしは
大事の地

何れに於て有りし徳多子午の上平以目録の如く大園
寺に於て小支一寺を命ぜりて高橋とて之を悪黨とて
火と称せりし事初に徳多子午の風を吹かせし事
中にもありし事一かを就將監置物とて命ぜりて焼出
し火焼さんより生幅十町半に廣く印付度
の留置一馬を大神の火忽て四方に散り印付度
大谷の路に伝流し大谷の大小名の西留置一馬を
どつとせしより掃天とて一馬焼く地を甚き日の
暮りりと程をゆく風はまじく盛んより内橋田
大谷の焼掃りて蔵権門の山家形と称せりて

平押に於て有る神田橋焼をり又所ある火掃りて
束の程廣く火を遠く置きし事ありし神田の路
湯原の路に火を越へて湯原令杉田五丁所
に焼出せり果に午に火を原に焼出て一夜に
火のくも明らかり又火を新のくも刻らるる事
業板より火を東水まで焼出せり此の火とて二丁に
引れ谷中へ火を移し東水とて火を引て家
ありし事焼出せり明るる二月程の事ありし
事これより火を引せりし事新の火を焼出せり
己刻より風を吹掃りて火を引せり焼出せり

山伏井戸といふとあり又風方智は暗くて東風を
感よりり是よりして新海河に細丁をんとするなり
いり西くと焼行申所傳る所をえいして室河
日中修り新風吹ず静よあり申修の火際を
糸の中刻斗より火と中りて焼止めまのよと
大小名のうね形玉様合殿尾を連修神社修閑
而より修り修りぬ高く職人のあともとて
形をかく身と競ひ建てるいりあらとれり門勢
して^{あつ}火塵よりあつぬく。原野のこく宮の門は修
格和の舎三物えり此名横田毎遠神田をんとす

伊門とい焼落く只濁あつる石和斗炭成とい
てい修りぬ勿修あつる。心観院殿の古雲を修り
仁王門日吉の社大社神田修修修修修修修修修修
而修修天徳寺とい修修修修修修修修修修修修修修
まて修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修
是れ方修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修
あり或い修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修
腕を焼修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修
而修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修
西く修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修修

師くつるに為れ言ふ阿房の古く形やとある
あれは凡そ安永火災の如く一不備を以て
長十の里に及ぶに及ばず一層に及ぶの中二層の
下三層の由は是より一層を以て志らるるは
斗に二百餘りありて一層の者を以て幾回も
斗を以て明暦二年の大火災と云ふ一未だ
もまづして百未だありたり何れ焼
くも一斗を以て幾回と云ふの如く
火焼くはしりて何れも焼くこと實に
のこるを以て一斗を以て幾回と云ふ
の如く

春もこれ其も水月には民が
他のいとも神りたりは是れも世の
故の如くありしれは川の様は
お海一是れ傾城所詔を以て
始りたりしれは一人も侍れ只
おのり業の志けりたりは
又年月はいつか武蔵守
孫は其の如くありたりは
以て其の如くありたりは
子孫申の刻にありたりは

人妻の御豆種といふ處を可成り宛合し
五月廿六日の夜に生殺一ひの廿四日
の夜に之を室永年中に御事ありし
御供の御事ありしに御事ありしに御事
幸の御事ありしに御事ありしに御事
ありしに御事ありしに御事ありしに御事



後見草中

